
Fate / Vesperia

六甲水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / V e s p e r i a

【Nコード】

N 0 8 8 8 Y

【作者名】

六甲水

【あらすじ】

世界を救った凜々の明星の一員の一人、ユーリ・ローウェル。だが、そんなユーリは突然光に包まれ、異世界で起こっている聖杯戦争にて、マスターである凜とサーヴァント達との死闘繰り広げるところに……

更新は一週間に一度

設定（前書き）

なんとなく行けそうな感じがしたので、やってみます。最初は設定だけで、

設定

クラス：ナイト（元騎士）

マスター：遠坂凜

真名：ユーリ・ローウェル

性別：男性

属性：秩序・善＋悪

筋力：B

耐久：B

敏捷：A

魔力：E

幸運：B
-

宝具：S

クラス別能力

能力向上：EX

武醒魔導器の力で戦闘中のみ、能力が向上する。対魔力の力も秘めているが、ユーリの場合は対魔力の力は使えない。

単独行動：A +

ユーリは死んでいないため、マスターからの魔力供給が無くても現界できる

保有スキル

悪運：EX

幸運よりも悪運のほうが高く、呪いの力を持つ武器の効果を食らっても無効にできる。

オーバーリミッツ

闘気を現界まであげた時のみ、使用できるスキル。その結果、魔術、宝具による攻撃などを一時的に防ぎ切ることが可能。

バーストアーツ：A

オーバーリミッツ時にマスターから魔力を受け取る事によって、使用できる奥義。その威力は宝具と同等の力でもある。

秘奥義：EX

バーストアーツ使用時に、自身の闘気が限界まで達した時のみ使用できる。相手を確実に仕留ることができる。但し、外れることもある。使用後は能力が一時的に下がる

宝具

明星式号

ランク：EX

オーバーリミッツ時のみ、使用可能な宝具。あらゆる魔術を切り裂くことが可能、呪いなどにも有効である。オーバーリミッツが発動状態に使用することにより、真の力が発揮することが出来る。

ニバンボシ

ランク：A

ユーリの愛用の剣。何の特殊な力は宿っていない。

魔装具

ランク：????

ユーリが今まで戦ってきたものの血と怨念がこもっている。使用時はユーリ自身の能力を全てSにすることができ、さらには戦ってきたサーヴァントの宝具と同じ能力が使える。但し、使用後にはユーリとマスター自身の魔力が空っぽになる。

設定（後書き）

とりあえず、ユーリのクラスは最初、ギルドかブレイダーに迷ったのですが、一応元騎士なので、ナイトにしました。あと宝具がチートすぎる気がします。

残りの凛々の明星はどんな感じになるかはわかりませんが、出す予定です。

第1話 ユーリ召喚（前書き）

第一話です。今回は凛との出会いまでやります。

第1話 ユーリ召喚

一人の少女が住む屋敷で、床に魔法陣を描き、何やら呪文を唱えていた。少女の名前は遠坂凜

「抑止の輪より来たれ。天秤の守り手よ」

そう唱え、魔法陣の輝きが最大になる。

（よおおっし！手応え最高！！これはもうこれ以上ないって言うカードを引き当てた…ッ！！）

が確かな手応えに喜ぶ。魔法陣の光が消え、地下室が静まり返る。いくら待っても何も起こらない。

「…ちよつと、なんで何も起こらないのよ！？まさか………失敗？そんな！儀式は完璧だったはず！！」

凜が大声を上げた直後。ドオン、と上から大きな音がする。

「！！」

凜が音がした上を向く。

「何！？居間の方から…！！」

急いで上に向かう。

「ちよつとちよつと……!!」

階段を上がる。

「ええいもう！一体全体、何だつてのよー!!」

怒鳴りながらドアを蹴破る。部屋の中はめちゃくちゃになっていたが、凜はそのことについては気にしていなかった。何故ならその部屋を中心に長く伸びた黒髪の男が立っていたからだ。

（ま、まさか、こいつがセイバー？確かに剣は持つてるけど、何だか軽装ね。）

「つう、いったい何だつたんだ？あの光は………」

「ねえ、あんた。私のサーヴァントでしょ。クラスは？」

凜が黒髪の男に聞くと、男は凜の方を振り向いて言った。

「サーヴァント？クラス？なんだそりゃ？」

「はあ？だからあんたは聖杯に選ばれた英雄の一人でしょ！だってら自分が何のクラスか知ってるはずよ。」

「悪いが、お前が何を言ってるか分からないんだが……俺はただギルドの仕事中におかしな光に包まれて、気がついたらここに来てたんだが………」

「ちよつと待つて、あんた英雄なのよね。あんたの言い方だとそれって死んでないってことじゃないのよ」

「英雄？悪いが俺は英雄なんてお高いものになった記憶はない。それに刺されて高いところから落とされたことがあるが、死んで事はないな。」

男が凜に向かって言うと、凜は体の力がなくなったみたいに、座り込んでしまった。

「ははっ、まさかセイバーを呼ぶつもりが……こんなおかしなサーヴァントを呼ぶなんて……」

「おい、大丈夫か？」

あまりのショックでしばらく立ち直れなかった凜であったが、少し経ってから凜は召喚した男に聖杯戦争について説明した。

「まずは聖杯戦争のルールね。私たち魔術師はサーヴァントっていう使い魔となり『聖杯戦争』という聖杯の所有権を巡る魔術師の戦

いに参加するのよ。」

「そのサーヴァントっていうのが、聖杯に選ばれた英雄の魂って言うわけか。」

「そう、本来は神話、伝説などの話に出てくるものよ。生前の偉業により英雄と認められた者は死後『英霊の座』ってところへ迎えられるの。でも、あんたは死んでないんでしょ、」

「ああ、まだ死んだわけじゃない。それに俺は英雄なんてものに興味はないしな。」

男がめんどくさそうに言うと、凜はため息を付き説明を続けた。

「聖杯戦争にはそれぞれ7つのクラスが存在するのよ。セイバー、ライダー、ランサー、バーサーカー、アーチャー、キャスター、アサシン。この7つよ。でも、あんたはその7つのクラスには当てはまらない。」

「その聖杯っていうのがミスしたんじゃないのか？」

「まさか、そんなわけ無いでしょ。聖杯がミスなんて……」

凜が聖杯がミスすることがないと確証を持って言うと、男はある事を言い出した。

「ところで、いい加減俺のことを『あんた』っていうのをやめてくれないか？俺にはちゃんとした名前があるんだ」

「そうだったわね。まだ自己紹介自体してないし……私はあなた

のマスター遠坂凜よ。」

「俺はユーリ・ローウェル。凜々の明星の一員だ。」

「凜々の明星？」

「ギルド名だよ。金とか払えば何でも仕事する。」

「ギルドねえ、じゃあ、私から依頼していいかしら？」

「なんだ？」

「仕事内容はこの聖杯戦争に絶対に私を勝たせなさい。報酬は……」

凜が報酬について言おうとした瞬間、ユーリが口を挟んだ。

「悪いが、報酬はいいや。」

「なんで？」

「この戦争にはあと6人のサーヴァントっていう英雄がいるんだろ。だったら……俺はそいつらと戦えればいいからな。」

「もしかして、あんたバトルオタク？」

こうしてユーリはひょんな事から聖杯戦争に巻き込まれるのであった。

第1話 ユーリ召喚（後書き）

次回はランサー戦とセイバーとの出会いをやります。

第2話 真夜中の決闘と出会い（前書き）

今回はランサーとの対決とセイバーの登場です。

第2話 真夜中の決闘と出会い

ユーリが召喚された次の日、凜が目覚め、リビングに入るとそこには驚くべき光景が広がっていた。

「な、何よこれ……………」

リビングにあるテーブルの上にはいくつもの料理が用意されていた。するとキッチンからエプロンをつけたユーリが現れた。

「起きたか。凜。勝手に朝食の準備しといたが……………」

「あんだ、サーヴァントのくせに料理なんて出来たんだ。」

「まあな。色々旅とかしているうちに覚えたからな。それに俺がいた世界の食材とこっちの世界の食材が同じ物だったから助かったけどな。」

（ユーリって、いったいどんな旅をしていたのよ。話し聞く限りじやこの世界とは別の世界にいたとか言ってるけど……………）

凜はそう思いながらユーリが作った料理を食べると……………

「……………」

「どうしたんだ？凜。」

（わ、私より上じゃないのこれ、くっ、まさか料理で負けるなんて……………）

ユーリは知らずの内に凜に勝利するのであった。

朝食を食べ終わり、ユーリが食器を片していると凜が制服姿でやってきた。

「ユーリ、私そろそろ学校行くけど、あんたも付いて来なさい。」

「学校？ああ、勉強するところか。」

「そうよ。というかユーリがいた世界に学校とかあったの？」

「まあ、あるっちゃあるが、基本的には勉強とかは自分たちで勝手のやるだけだからな。」

（本当にユーリは一体、どんな世界にいたのよ。）

ユーリの世界について少しずつ興味を持ち始める凜であった。ふつと、凜はユーリがつけている腕輪に埋め込んである宝石に眼をやった。

「ねえ、ユーリ。その腕輪についてるの……」

「ん、ああ、武醒魔導器だよ。これがあれば装備している奴の身体能力が格段と上がって、魔物とかと戦えるようになるんだ。まあ、今は何の力も宿さないものになったけどな。」

ユーリは腕輪を見て、少し悲しそうな表情をしていた。すると凜はそっとユーリの腕輪に触れた。

「な、何だよ。いきなり……」

「ちょっと待ってなさい。今、この宝石に魔力を流しこむから……」

凜がそう言いながら、宝石に魔力を流し、しばらくしてから腕輪の宝石が赤く輝きだした。

「これは……」

「その武醒魔導器ってやつ機能を復活させといたわ。それなら自由に使えるはずよ。」

「へえ、凜はこんな事出来るんだな。」

「さあ、魔力の供給もやったことだし、学校に行くわよ。ユーリは学校が終わるまで近くで待機してなさい。」

「へいへい。」

ユーリはまだ生きている状態なので霊体化することができない。なので、学校の近くで待機してもらおうようにと凜は命じるのであった。

凜が学校の校門を通るとある違和感に気付く。

（これは結界？早速戦争が始まるというのね。それにしても……この結界、やばいわね。もしも生命を脅かすものだったら………）

凜はそう思いながら、そのまま校舎へと向かうのであった。

そして放課後、

凜はユーリと合流し、結界の痕跡がある屋上へと向かった。

「これが結界か。それにしても魔術師っていうのはそんな下劣な結界とか考えるんだな。」

「その言い方だと、ユーリの世界にも結界があるのね。」

「ああ、魔物が侵入できないようにって街を守る結界だった。それで、凜。その結界を壊すにしても……」

ユーリはそう言いながら、腰に差した剣『ニバンボシ』を抜くと……

「どうやら、邪魔する奴がいるみたいだぞ」

「えっ、」

ユーリと凜が屋上のフェンスを見るとそこには青い髪に体にフィットした青い服を着ており、手には真赤な槍を持っている男がいた。

「ほう、怪しい気配がするって聞いて来てみれば……よく俺がいることに気がついたな。」

「こっそりのぞき見るなら、殺気くらい消したらどうだ？」

「ふん、面白い男だ。俺は見ての通りクラスはランサー。お前は何か？セイバーか？」

「いや、俺は……」

ユーリにはクラスがない。そのことを他の魔術師に知られれば、真っ先に凜が狙われることとなる。なにせ、クラスがない＝弱いとい

うことになりかねないのだ。だから、ユーリはランサーに向かってこう答えた。

「俺はナイトだ。」

ユーリの宣言を聞いたランサーは少し驚いていた。まさか7つのクラスしか無いはずが、8つ目のクラスを名乗る奴がいるとは思っても見なかった。

「おもしれえ、勝負だ。ナイト！」

「いいぜ、凜。下がってる」

「任せたわ。」

凜が後ろへ下がると、ユーリとランサーが同時に攻撃を仕掛ける。

ユーリはランサーの槍を剣で受け流し、ランサーはユーリの剣を槍で弾く。二人の実力は全くもって互角に近いものであった。

（ユーリ。かなり強いじゃない。もしかしたらセイバークラス以上に凄いの引き当てちゃった？）

ユーリの強さに感激している凜。そんな中、ユーリはランサーの連続突きをバク転で避けた。

「その強さ。その身のこなし、騎士が使うような剣技ではない。我流か？」

「へえ、まだ特技とか見せてないのに、よく気がついたな。確かに基本的には騎士団で教わったもんだけど、あんなも途中で敵に攻

撃されちまうから、自分でアレンジしたんだよ。」

（ユーリって、ナイトを名乗る資格あるのかしら？）

凜は心のなかで突っ込みを入れると、ランサーは楽しそうに笑っていた。

「ははっ、本当におもしれエやつだ。型にはまった攻撃じゃこっちが少しばかり分が悪いな。だったら……我が必殺の一撃にて」

槍を持つランサーの手に更に力が入る。

「貴様を討つ！！！」

ランサーが凄まじい殺気を放つ。ユーリもその殺気を感じて剣を構え直す。

（なんて魔力なの！！）

凜もランサーの槍に込められていく魔力を感じ取っていた。

（まるで周囲の熱を根こそぎ奪ってるようだわ！禍々しい殺気があるの槍先に集中していく……！！まさか……！！）

凜はランサーが持つ槍の正体に気が付いた。

「その心臓、貰い受ける！！」

「防御しちや駄目よ。避けなさい。」

「ゲイ」

凜が叫ぶが時既に遅し、ランサーはユーリに向かって槍を投げつけていた。

「ボルグ……！」

因果の理を捻じ曲げる槍。『ゲイボルグ』。それはすなわち「心臓を穿つ」という結果を「槍を放つ」という原因より先に生じさせてしまうこと。故に放てば敵の心臓を捉え、避けることは不可能。真紅の魔槍がユーリの心臓に迫り、ユーリはそのままフェンスを突き破り校庭へと落ちていった。

「ユーリ……！」

「サーヴァントは処理した。残るは………魔術師の小娘だけ。」

凜を殺そうとランサーは近づく、凜は咄嗟にポケットにしまい込んだ宝石を取り出そうとしたが、突然ランサーの足元に赤い閃光が現れた。

「これは………」

その閃光の正体はランサーの持つゲイボルグだった。何故、こうして戻ってきたのかランサーも凜も分からなかった。すると、破壊されたフェンスの向こうからユーリがよじ登ってきた。

「つう、ゲイボルグか。俺がいた世界でもジューディがそれを使ってた覚えがあったけど、まさか心臓を狙ってくるとはな………」

「き、キサマ、どうやって……」

ランサーがユーリの方を見ると、ユーリの右肩から血を流していた。

「咄嗟に右肩をゲイボルグの軌道に置いて防いだんだよ。さすがに肩が上がらなくなったけどな………まだ戦えるぜ。」

ユーリが剣を構えなおした。

「クツ……ハツハツハツ！ハーハツハツハツ！」

突然、ランサーが高らかに笑い出す。そして……

「いいぜ、お前、本当に……ゲイボルグをそんな方法で防ぎ、あまつさえ、俺の宝具を使っていた奴がいるとはな。さあ、続けるぞ。ナイト」

「来い！」

ユーリとランサーの間に殺気の渦が巻き起こる。だが、ランサーは突然槍を下ろした。

「どうやら、余計な観客がいるようだな。」

ランサーがそう言った瞬間、屋上の扉から誰かが走り去る音が聞こえた。ランサーはそのまま音の正体の元へと向かった。

「どうしたんだ？あいつ？」

「マズイわ。ランサーの奴、目撃者を消す気よ。追うわよ。ユーリ」

「待てよ。まだ肩の治療が……」

「悪いけど、私は治療とかできないのよ。」

「はあ、凜、さきに行ってる。追いつくから……」

「分かったわ。」

凜は目撃者とランサーを追った。残ったユーリは剣を地面に突き刺し、

「守護方陣!!」

ユーリの周りに白く輝く魔方陣が現れると、ユーリの肩の傷が少しずつであるが塞がっていく。

「とりあえず、フレンが使うのを見よう見真似でやってみただけど、さすがに全開までとはいかないか。さて、凜を追うか」

ユーリは校舎の中をウロウロと歩き回っていると、凜とばったり遭遇した。

「凜。あの野郎は？」

「逃げられたわ。目撃者を消し終わって、自分のマスターの元に帰ったはずよ。」

「その目撃者とか言うのは？」

「死にかけてたけど、何とか助けたわ。それでも私は魔術師なのよ」

「いや、待てよ。お前、回復ができないとか言ってたよな。出来るじゃねえか。」

ユーリは怒りながら、凜に詰め寄ると凜は……

「しょうがないじゃない。あいつを助けるために大切な宝石使っちゃったんだから、それにユーリの場合は大丈夫そうだったから……」

「くっ、まあいい。肩の傷も少し直せたし、これからどうする？ ランサーを追うか？ それともその助けた奴のところにも行くか？」

「はあ、何だよ。」

「いや、お前が治して、家に帰らせたんだろ。だけどよ、それって

マズイだろ。始末した奴が生きているってランサーの奴が気がついたら……またそいつ殺されるぞ」

ユーリが冷静に状況を言うと、凜は走りだした。

「行くわよ。ユーリ」

「たくっ、忘れてたのかよ。」

凜の案内で目撃者の家へとたどり着き、塀をよじ登りながら家の中に入り込むとそこではさっきのランサーと今度は金髪の鎧を着た少女が戦っていた。

「あれは？サーヴァントか？凜」

「え、ええ、多分セイバーよ。」

凜とユーリはじつと二人の戦いを見ていると、ランサーはユーリの姿に気がついた。

「ちつ、ナイトまで着たか。このままじゃ分が悪いな。じゃあな！」

ランサーは塀を飛び越え、夜の街へと消えていった。するとセイバーは……

「新たな敵か。来い！」

剣を構えるような格好を取るセイバー。凜はセイバーが持つ剣についてあることに気がついた。

「不可視の武器!？」

「見えない剣って奴かそれ？」

「そうね、気をつけて……来るわよ」

「しょうがねえ、」

ユーリは剣を回転させながら、セイバーへと向かっていった。

第2話 真夜中の決闘と出会い（後書き）

次回辺りでセイバーとの戦いが終わります。

第3話 セイバーvsユーリ（前書き）

今回はセイバーとユーリの戦いです。次回辺りにバーサーカーと凛々の明星のメンバー一人を出す予定です。

第3話 セイバーvsユーリ

凜が助けた少年の屋敷へと向かったユーリと凜。だが、そこでは新たなサーヴァントセイバーが襲撃してきたランサーを退けていたが、セイバーは今度はユーリに攻撃を仕掛けてきた。

「ハアア!!」

セイバーの见えない剣をユーリは二バンボシで受け止める。

「さすがに見えないんじゃ、避けることができないな。」

「私の剣を受け止めるとは、やりますね。あなた、」

セイバーとユーリは同時に後ろへ下がった。ユーリはこのまま剣での戦いでは少しばかりセイバーの方が分があると思った。

（肩の傷も治りきつてないしな。このままだとセイバーに押されちまうが……）

ユーリはさらにセイバーと距離を置き、剣を下から思いっきり振った。

「蒼破刃!!」

振った瞬間、セイバーに向けて衝撃破が放たれた。セイバーはその衝撃波を避け、ユーリに接近した。

「ハアア!!」

「貰ったぜ！噛烈襲！」

剣を振りかざしたセイバーは、胸ががら空きとなり、ユーリはそこに何発もの拳を食らわせた。

「くっ、剣術だけではなく、武術まで………やりますねあなた」

「お前こそ、女にしては俺の攻撃を受けきるなんてな。」

「ですが、私はまだ本気を出しておりません。あなたも肩の傷のせいで本気を出し切れていないようですし」

セイバーはランサーから受けた肩の傷を見抜くと、ユーリは剣を鞘に収めた。

「そうだな。あんたとは全快の状態で戦いたいからな。」

「ええ、それに貴方からはシロウを殺そうとする気が無いとわかりました。」

「そっか、だとよ。凜」

離れていた所で様子を伺っていた凜と凜が助けた少年、セイバーが言うには士郎という名前らしい。

「そうね。衛宮くん。あなたに色々と話さなきゃいけないみたいだから、中でちょっと話しましょう」

「ああ、」

ユーリたちは大きな屋敷の中へ入り、聖杯戦争や魔術師に付いて話した。士郎の話から士郎もまた魔術師の一人でもあるらしいが、使える魔術は物質の強化らしい。

「じゃあ、行くわよ」

「行くつて、どこにさ？」

「教会よ。内容は後で話すわ」

ユーリたちは夜の街を歩いていた。目的は教会に向かうためだ。

「なあ遠坂。一体何しに行くんだ？」

「この戦いの”監督役”に会いに行くのよ」

「監督役？」

「聖杯戦争を取り仕切ってる奴よ。貴方がこれからどうするにせよ。会っておいて損はないわ」

凜と士郎がそんなことを話している中、ユーリは隣を歩くカッパ姿のセイバーに話しかけた。

「セイバー。お前、その格好はどうなんだ？」

「すみません。普通なら霊体化できるはずなのですが、どうやら出きないらしく。シロウがこれを着てると言われたので……」

「怪しすぎだろ」

ユーリがそうツツコミを入れるのであった。

教会へたどり着き、凜と士郎の二人は教会の中に入り、ユーリとセイバーは教会の外で敵が来ないか見張っていた。そんな中セイバーがユーリにあることを聞いた。

「そういえば、ユーリ。あなたは一体何のサーヴァントなのですか？ クラス的には私と同じセイバーに近いようですが、」

「そうだな。俺にはクラスは無いらしい。」

「クラスがない？それは本当ですか！？」

セイバーが少し驚いていた。ユーリほどの実力者にクラスがないというそれはそれで驚きものだ。

「クラスがない。でも貴方は英雄として召喚されたのでは……………」

「英雄か。悪いが俺はそんな英雄なんて名誉なものには興味がないぜ。」

「英雄に興味がない？それはどういうことですか？」

「俺は英雄より、ギルドで仲間と楽しくやっていたほうがいいからな。英雄は親友の方があつてるからな。」

ユーリの表情を見たセイバー。ユーリの表情はどこか遠くを見つめる感じがした。

しばらくして、凜と士郎が戻ってくる。

「お待たせ。衛宮君にはしっかりと教え込んでおいたから」

「そうか」

「セイバー。ちょっと頼りないマスターだけど、これからよろしく頼む」

士郎が手を差し出す。

「はい。こちらこそマスター」

セイバーが差し出された手を握る。

「んじゃ、用も済んだしとつと帰ろうぜ」

「そうね」

一行は歩き出すのであった。こうしてユーリの二日目は終わりを告げる………はずであったが、一行を見つめる二人組があった。

「やあつと出てきた」

影の一つが喋る。

「行こう。バーサーカー。わたし待ちくたびれちゃった!」

夜の街を走る一人の少女がいた。

「ユーリを探しに来たはずなのに……ここは一体……折角精霊たちが力を貸してくれたのに……」

その少女はピンク色の髪を揺らしながら走るのであった。

第3話 セイバーvsユリ（後書き）

次回バーサーカーとあのキャラの登場です。ちなみに自分的には多分Fateで一番好きなキャラです。

第4話 狂戦士襲来（前書き）

ついにバーサーカーとの戦いが始まります。まだ序盤なのにユーリがピンチになります。

第4話 狂戦士襲来

教会からしばらく歩いてたさきで、凧が立ち止まった。

「ここで別れましょう衛宮君」

振り返って士郎に言う。

「わかってると思うけど、次に会う時は敵同士よ。言うておくけど手加減なんてしないわよ」

「セイバー、今度はしっかり決着つけようぜ！」

「ええ、今度は引き分けという結果に終わらせません。」

ユーリはセイバーと握手を交わしていた。そんな二人の光景を凧と士郎は微笑みながら見ていた。

「それじゃあ、行きましょう。ユーリ」

「ああ、」

ユーリは先を歩く凧の後を付いて行こうとした瞬間、ユーリ突然立ち止まった。

「どうしたの？ユーリ。」

「凧、士郎、セイバー。気をつける。どうやらお客さんみたいだぜ。」

ユーリは二本ボシを抜き、鞘を捨て、坂の上の方を見つめていた。凜たちも坂の上を見つめるとそこには雪のような白い髪の少女が一人がいた

「もう帰っちゃうの？夜はまだまだこれからなのよ」

「子供のくせに思いっきり殺気を出しやがって……何者だ？」

ユーリが少女に向かって言うと、少女は薄く笑った。

「はじめまして。わたしはイリヤ。イリヤスフィール・フォン・アインツベルンと言えはわかるかしら？」

「なんですって!？」

凜が驚愕する。

「知ってるのか遠坂？」

「アインツベルン……。毎回、聖杯戦争にマスターを送り込んできてるヤツらよ」

「え…それじゃマスターなのか!？」

「そうだよ。お兄ちゃん」

イリヤが笑いながら話す。

「でもわたしの一番の目的はね……」

くるりと体を一回転する。

「お兄ちゃんを殺すこと」

少女の声とは思えない冷たく、殺意の籠った声でそう告げた。

「……!!」

士郎が思わず一步後ずさる。

「わたしね、この日が来るのをずっと待ってたんだ」

無邪気に笑いながらイリヤが話す。

「お兄ちゃんを殺すこの日を！おいでバーサーカー!!」

イリヤの声と共に地を揺るがす大きな音がする。イリヤの後ろに鉛色の巨人が現れる。鋼のような肉体。他を圧倒する威圧感。見ただけで相手を射殺せそうな眼。

「……!!」

その圧倒的な”脅威”に凜と士郎は金縛りにあつたように動けなくなってしまう。

（これがバーサーカー！？なんてデカさよ!!）

凜が驚愕の目でバーサーカーを見る。そんな緊迫した中、ユーリは

……

「はは、まさかこんなに早くこんな奴に会えるなんてな。」

笑っていた。バーサーカーの脅威を感じて凜と士郎は怯えているのに、ユーリは強敵に会えたということに嬉しそうにしていた。

「へえ、そっちのお兄ちゃんは私のバーサーカー見て怯えないんだ？面白い人だね。バーサーカー、やっちゃえ！！」

「！！！！」

バーサーカーは咆哮しながら、ユーリに突進してきた。ユーリはバーサーカーの突進を何とか避け、避けた瞬間、バーサーカーに向かって攻撃を仕掛けた。

「絶風刃！」

風の刃がバーサーカーの体を切り裂いた。

「見掛け倒しだな。」

ユーリがイリヤに向けて挑発をすると、イリヤは……笑みを浮かべていた。

「ふふ、その程度で私のバーサーカーがやられると思ってるの？」

「何！」

「ユーリ！後ろ！」

凜の声を聞き、ユーリは後ろを振り向くとそこには大剣を振りかざしたバーサーカーの姿があった。

「……………」

ユーリは咄嗟にニバンボシで大剣を防ごうとしたが、そのまま後方に吹っ飛び壁に叩きつけられる。

「がはっ……！」

ユーリが血を吐き、壁が音を立てて崩れた。

「……ユーリ……！」

凜と士郎の二人がユーリの名前を呼ぶが、ユーリは反応しなかった。

「シロウ。下がってください……！」

セイバーはカップを脱ぎ捨て、不可視の剣を構え、バーサーカーに向かっていった。

不可視の剣でバーサーカーに斬りかかる。だがセイバーの剣はバーサーカーを斬ることなく鈍い音を立て弾かれてしまう。

「……………」

バーサーカーが吠えながら大剣を振る。それを跳んで避け、後方へ移るセイバー。バーサーカーが続けて大剣を振る。それを剣で受け止める。力負けして少し後ろに押されてしまう。

「く…！」

なんとか大剣を弾く。だがバーサーカーの猛攻は止まらない。バーサーカーが大剣を振るたびに、車や電柱など周りの物が破壊される。巨体に似合わぬセイバーを上回る素早さ。当たれば”死”へ繋がる重い一撃。セイバーはバーサーカーの攻撃を捌き続ける以外、方法は無かった。

「なんてバケモノよ…！」

そう言つて凜は左腕の袖を捲くる。そして腕に刻まれた魔術刻印が光る。

「くらえ…！」

凜の手から黒い弾丸、ガントを放ちバーサーカーに直撃するが、バーサーカーは無傷であった。

「そんな…！？全然効いてない…！」

「無駄よリン。バーサーカーには一定以上のランクの魔術じゃないと効かないわよ。それにそっちのサーヴァントももう少しで終わりそうだね。」

笑いながらイリヤが話した。凜と士郎はセイバーの方を向くと、セイバーは頭から血を流し倒れていた。

「セイバー…！」

「くっ、強すぎる。」

「誰もわたしのバーサーカーには勝てないわ」

イリヤがバーサーカーの隣に立つ。

「バーサーカーの真名はヘラクレス。古代ギリシャ最大の英雄なのよ……!」

楽しそうにイリヤが喋る。

（ヘラクレス!?）

「サーヴァントは人々の認知度に強く影響されるの。この世に広く知れ渡った英雄ほど、そのサーヴァントは強力になる」

サーヴァントの強さについて話す。

「だから、ヘラクレスに勝てるものなんかないのよ!」

その時、セイバーが剣を突き立てて、立ち上がろうとする。

「セイバー……!」

士郎がセイバーのそばに寄る。

「もうやめろ!このままじゃお前本当に死んじゃまっぞ……!」

士郎がセイバーにそう叫ぶと。

「シロウ………」

セイバーが士郎の顔を見る。

「サーヴァントが最も優先すべき事は…マスターの命を護ることです」

「!?!」

「ですから…いかなる敵が現れようと、私は必ずマスターを護ります!」

力強く言葉を放つ。

「ふーん。まだバーサーカーと闘う気なんだ。まあ遊んであげてもいいけど……その前に…」

そう言ってイリヤは凜を見る。

「!?!」

「バーサーカー!先にサーヴァントのいないマスターを殺しなさい!?!」

「!?!?!」

吠えながら凜に向かって突進する。

「遠坂つ!?!」

士郎が走り出すが間に合わない。

「……………!!」

凜が目を閉じた。だが、バーサーカーの攻撃はいつまで経っても来ない。凜は恐る恐る目を開けるとそこには血だらけのユーリがバーサーカーの大剣を二本ボシで受け止めていた。

「イリヤって言ったか？悪いが凜は俺の依頼主だ。勝手に殺そうとするんじゃないぞ」

ユーリの体を白いオーラが包み込んでいた。

「これは……………」

凜は驚きながら呟くと、セイバーはユーリが出している白いオーラの正体に気がついた。

「あれは、闘気。」

「闘気？」

隣にいた士郎がセイバーに何か聞くと、セイバーは……

「闘気は魔力と近いものです。闘気は誰にだって出せますが、あそこまではつきりと浮かび上がるとは……………」

「へえ、お兄ちゃん。やるね。バーサーカーの攻撃をまともに受けて立ってるなんて……………でも、もう限界のはずだよ。」

「へっ、気づいていやがったか。」

凜がユーリの足元をみると少しだが震えていた。ユーリが数多くの死闘を繰り広げたとはいえ、ランサーによって傷ついた肩のせいで普段通りの力を出せず、さらにはバーサーカーの攻撃を受けて、血を流しすぎた。

（まずいわ。この状況じゃ、私達二人はここで……………死ぬ）

凜が諦めかけていた。そんな中バーサーカーはもう一度ユーリに向かって大剣を振りかざした。この場にいた全員がユーリの死ぬとわかってしまった。だが、

「堅牢なる守護を……………バリアー！」

突然ユーリを包み込む白い障壁がバーサーカーの攻撃を弾いた。凜達、イリヤも声が聞こえた方を見るとそこには桜色の髪の少女がいた。ユーリはその少女を見て、名前を呼んだ

「え、エステル？」

「ユーリ！探しましたよ。ようやく見つけたと思ったら傷だらけですし、今治します。そちらの騎士さんも。白き天の使い達よ、その微笑みを我らに……………ナース」

エステルが呪文を言うと、どこからともなく天使のような精霊がユーリとセイバーを白い光に包み込み、二人の傷を癒した。

「さすがはエステルの治癒呪文だぜ。」

「これは……………傷だけではなく体力も……………」

エステル呪文を見て、凜は驚いていた。

「こんな高度な呪文を……私と変わらない子が……」

「さて、バーサーカー。これから再戦と行こうぜ」

ユーリが剣を構え直すと、イリヤは……

「面白いね。お兄ちゃんたち。ねえ、名前は？」

「あん？ユーリ・ローウェルだ。クラスは多分ナイト」

「あはは、本当に面白いや。今回はこのまま見逃してあげる。」

イリヤとバーサーカーはそのまま夜の闇へと消えていった。

突然現れたエステルはユーリとセイバーの治癒を行った。

「とりあえず、お二人の怪我を治しました。」

「すまない。」

セイバーが丁寧にお礼をいうと、ユーリは……

「ところで、エステル。お前、何でこんな事に……………」

「それは……………」

エステルが何故この場にいるか言おうとすると、凜がユーリ、エステル、士郎、セイバーに向かってこんな事を言った。

「ちょっと待って、積もる話もあるだろうし、悪いけど、衛宮くん。あなたの家で色々話し合いたいんだけど」

「ああ、別にいいけど……………」

こうしてユーリたちはバーサーカーの脅威を回避するのであった。

第4話 狂戦士襲来（後書き）

とりあえず、エステルを登場させました。次あたりでるのは、リタにします。

第5話 休戦と訪れた理由（前書き）

今回はエステルがどうやって来たかの理由をやります。

第5話 休戦と訪れた理由

バーサーカーを退けたユーリ達。一行は傷の手当のため士郎の家に来ていた。

「ねえ衛宮君。一つ提案があるんだけど」

「提案？」

「私と同盟を組まない？」

「同盟！？俺と遠坂がか！？」

凛の突然の提案に驚く士郎。するとエステルに肩の傷を癒してもらっているユーリがこんな事を言ってきた。

「確かに、今回はエステルが来たから何とかあいつを倒せたけど、次はそうは行かないだろ。それにあのイリヤってやつはどうにも、士郎を狙ってるみたいだし、それに俺まで興味持たれたからな。俺は凛の提案はいいと思うぞ。」

「シロウ。私も賛成です。一刻とはいえ、ユーリと手を組むことはいいと思います。」

セイバーも凛の提案に賛成する。士郎はユーリとセイバーの話を聞き、凛に手を伸ばした。

「分かったよ。遠坂。同盟を組む」

「ええ、よろしくね。」

士郎と凜は握手を交わした。これで同盟を組むことになった二人であつたが、ユーリはエステルにあることを聞いた。

「それで、エステル。お前は何でこの世界にいるんだ？お前もどつかの魔術師と契約したのか？」

「魔術師？いいえ、私は精霊たちが力を貸してくれて、ここに来たんです。」

エステルの話を聞いて、凜と士郎は同時に？マークを浮かべていた。

「あいつらか。何でまたそんなことを？」

「はい、実は……………」

「ちょっと待ちなさいよ！」

エステルの話に凜が割り込んでくると、ユーリは……

「どうしたんだ？凜？」

「ここ何日か色々遭つて聞けなかったんだけど、ユーリ、あなたの世界はどういうところなのよ！普通に精霊とか話してるけど、私達が知ってる精霊じゃ、そんな簡単に次元を超えたりとか出きないわよー！」

「そういえば、まだ話してなかったっけ。折角の機会だ。話してやろうぜ。エステル」

「はい。」

ユーリとエステルは凜たちに自分たちの世界について話した。

古代の技術で生み出された魔導器の恩恵を受ける世界テルカ・リュミレース。人々は、魔導器の力によって街に結界を張り、魔物に脅かされることのない平和な日々を送っていたある日、帝都ザーフィアスの下町に住んでいたユーリは、下町の水道魔導器から魔核を抜いた泥棒追っていた。それをきっかけにユーリの親友であるフレンが危ないと知り、次期皇帝候補である姫であるエステルと出会い、ユーリとエステルと相棒のラピードと一緒にフレンの所へ向かいつつ魔核泥棒を追うことになった。

「って、そっちのエステルって子。姫さまなの!？」

「はい。そうです。」

話の途中で凜がエステルにそんなことを言っていた。すると土郎とセイバーは……

「確かにそう言われればそうとしか見えなくなってきた。」

「最初会った時から私は、彼女から気品さを感じていましたか……」

「というか、話を続けるぞ。」

ユーリの一言で全員が返事をした。

魔核泥棒の黒幕である紅の絆傭兵団の首領・バルボスを打ち倒し、魔核関係の事件は終わったと思ったが、そんなユーリ達の前に突如現れた人語を喋る謎の魔物がエステルを命を奪おうとする。騎士団とギルドの助けを借りて難を逃れたものの、エステルは自分に向けられた「世界の毒」という言葉に戸惑う。世界の毒とは、満月の子とは何なのか？ 真実を知るべくエステルは、ユーリら新興ギルド『凜々の明星』に護衛を依頼し、謎の魔物を追う中、帝国の闇や世界の危機について知るのであった。

「その満月の子って何なのよ？」

凜がエステルに聞くと、ユーリが代わりに答えた。

「まあ、簡単に言うと、魔導品が無くても術が使える奴のことだ。普通なら俺達の世界にあるエアルってやつを利用して術とか搦んだが、エステルの場合はそんなの関係なく使える。」

「魔導品って確か、ユーリがつけている腕輪だっけ？」

「ああ、そうだな。」

ユーリはそう言いながら腕に付いている魔導品を見つめていたが、その表情は少し悲しそうであった。するとエステルは……

「でも、満月の子は私達の世界のエアルを乱すものなんです。エアルが減れば世界は滅びかねない。それを防ぐためにテルカ・リュミレースに大昔からいる魔物、始祖の隸長が私を殺そうとしてきました。」

「だけど、俺たちはアイツらにそんなことをさせないように、エステルがエアルを乱さずに術を使えないかって調べることにしたんだ。だが、そのエステルの力を利用しようとしたのが……帝国の騎士団長アレクセイだ。」

アレクセイはエステルの力を利用し、ザウデ不落宮と呼ばれる巨大な兵装魔導器と考えたアレクセイが、世界を支配するために利用しようとしていた。そのためにエステルの力が必要であったため、エステルを捕まえ、ユーリ達を傷つけていった。

「あの時はこれ以上、ユーリたちを傷つけてしまふなら、死んでもいいって思っていました。だけど、それを止めてくれたのはユーリでした。」

「このわがままな姫様は言っても聞かないからな。とりあえず俺たちは捕まったエステルを助けて、黒幕のアレクセイを追い詰めたんだ。」

「でも、アレクセイは知りませんでした。ザウデのほんとうの意味を……」

ザウデの正体は古の満月の子たちの命を動力にした巨大な結界魔導器。テルカ・リュミレースを結界で包み、星喰みを封印していたに過ぎなかった。後にアレクセイがシステムを起動してしまった事で結界は崩壊し、星喰みの帰還という事態を招いてしまった。星喰みは世界を覆うほどの『災厄』であった。

ユーリ達はその星喰みを消すために世界中にある魔核を全て精霊に変えてエアルの減少を防ごうということにたどり着き、争いを続けていた世界は一つになったのだった。

話を聞き終えた一行は、凜とユーリとエステルは一度家に帰るのであった。士郎とセイバーは凜たちと別れると、セイバーは庭に出てあることを思いつめていた。

（騎士である者が世界を支配しようとは………世界が違うだけで人の心というものは変わるものなのだな。）

セイバーは自分が生きていた時代のことを思い出している中、ユーリのことである事を考えていた。

（ユーリ・ローウェル。彼は何故あそこまで英雄ではないと言って

いるのだ？それに……ユーリたちから聞いた話、まだ何か隠していることがある。）

一方凜たちは……

「それで、結局、エステルがこっちに来た理由は何だったのかしら？」

「そういえば、聞いてなかったな。」

「そうでした。実は、ユーリが行方不明になったってカロールから聞いて、みんなで世界中を探し回っていた時に、私の中の精霊たちがユーリがいる世界に星喰みクラスの災厄をもたらす物があるって聞いて……精霊たちがこっちの世界に連れてきたんです。」

「星喰みクラスの災厄？何か心当たりあるか？凜？」

「ないわね。もしかしたら、どっかのサーヴァントがもたらすかもしれないじゃない。」

凜の言葉を聞いて、納得するユーリ達であったが、それは後に最大

の敵との戦いになるとは思っても見なかった。

「という訳で今日からここでお世話になるから、よろしくね衛宮君」
笑顔でそう告げる凜。

「…なんでさ？」

「私達は戦略上、常に行動を共にする必要があるの。あつ私どこで寝ればいいの？」

「…ああ…離れがあるからその部屋を…ってちょっと待て！遠坂！――」

士郎が止めるのも聞かず、凜はユーリを連れて歩く。部屋に着いて、持ってきた荷物を出す。

「遠坂は女の子なんだから、こういうのはまずいんじゃないか？」

「衛宮君。アンタも魔術師の端くれなら覚悟を決めなさい！」

「諦めたほうがいいと思うぞ。士郎」

ユーリはそう言いながら士郎に同情するのであった。

「それじゃあ、私とエステルは一緒の部屋で、ユーリも勝手に部屋使ったら？」

「って、家主俺なんだけど！」

こうして、夜は明けるのであった。

第5話 休戦と訪れた理由（後書き）

次回はライダー戦でもやりたいと思います。

第6話 暗闇に潜む者たち（前書き）

今回はちょっとした話をやり、大河たちとの出会いをやります。

第6話 暗闇に潜む者たち

ユーリ達がバーサーカーと戦っていた時、とある屋敷の地下では三人の男がいた。一人は老人。もう一人は黒い礼服を着た男。そしてもう一人は……銀髪の鎧を着た男。三人の男の前には魔方陣が描かれていた。

「キャスターがルールを破り、本来のアサシンを呼び出すことができなくなったが、お前が連れてきたこの男のおかげでどうにかできそうじゃ。」

老人が礼服を着た男に向かって言うと、男は……

「今回の聖杯戦争は些かイレギュラーが多い。一つは本来この世界に呼び出すことが出きないはずの者が召喚されたこと。もう一つは次元を超えて8人ほどこちらに来たこと。このままでは聖杯戦争事態が狂ってしまう。ならば、一度歪んでしまったことをもう一度歪み直し、元の聖杯戦争へ戻すためには………これが必要だ。」

「では、貴様が持つ令呪を渡してもらうぞ。異世界の騎士よ。」

「ああ」

銀髪の男は左手に刻まれた紅い刻印を老人の右手に写した。すると魔方陣から黒い腕が伸びた。

「クク、感謝するぞ。これで間桐の計画は成就する。」

士郎が目を覚ますと何故か居間の方が騒がしかった。士郎は疑問に思いつつ居間へと向かうとそこでは…………

「もう、遠坂さんは、」

「いえ、私は本当のことを言ってるだけですから」

「それでこれにコレを入れるともっとうまくなるからな」

「なるほど、勉強になります。」

「エステル。おかわりを」

「はい、今お持ちいたします。」

士郎のクラスの担任である藤村大河、士郎の後輩で弓道部の間桐桜の二人はいつも朝食の時間にこうしてきてくれたりするが、何故か

今日だけは凜たちと仲良さそうに団欒していた。それを見て驚いている土郎。すると大河は……

「あつ、土郎。おはよう。聞いたわよ。遠坂さんの家、改修中で暫くの間ここに住むんだって、それに切嗣さんの知り合いの人たちも来てるんだって、」

大河の話聞いて、土郎は凜を睨むと、凜は笑顔で……

「ごめんなさい。衛宮くん。昨日は遅かったみたいだから、ユーリ達が朝食作ってくれたみたい。」

（遠坂。猫かぶりやがって………というか、ユーリ達も馴染みすぎだろ。）

土郎は心のなかでツッコミを入れるのであった。

朝食を終え、桜は部活の朝練へと向かい、大河も職員会議があるというので早めに学校へ向い、土郎は……

「遠坂。お前………」

「あら、私達が衛宮くんの家にいる理由、いい考えだと思ったんだけど、」

「だったら、それを昨日の時点で言っておいてくれよ。こっちはいきなり過ぎて訳がわからなかったぞ。」

「あら、それは大変だったわね。それに藤村先生に頼むことがあったんだけど、了承してくれたわ。」

「了承？何をだ？」

「おい、凜。これでいいのか？」

ユーリが凜を呼ぶ声が聞こえ、士郎が振り向くと何故か穂群原学園の制服を着たユーリとエステル。そしてセイバーまでもがいた。

「似合ってるじゃない。」

「似合ってるじゃないじゃねえよ！何でユーリ達が制服着てるんだよ！？」

「だって、三人とも霊体化とかできないし、とはいえ、エステルは普通にこっちに来たから出さないけど、他の二人の場合はこのまま家で留守番させていたら、もしも学校とかで他のマスターが襲撃してきたら大変じゃない。だから、三人ともこうして学校で自由に動けるようにね。」

凜のとんでもない計画に土郎はただ啞然とするだけであつた。

そして学校では転入生として入った三人が自己紹介をし、直ぐにクラスに馴染んでいるのであつた。そんな中、屋上では一人の少女が

.....

「全くなんなのよ。この世界は.....あの馬鹿追つてきたらこんな場所に出ちゃうし、それにこの術式、何かしら？」

少女はそう言いながら、地面に書かれた魔方陣に触れると.....学校全体に紅い結界が発動したのだ。

「あれ？私何かまずつた？」

少女が冷や汗を掻きながら言うと、突然後ろから声が聞こえた。

「まさか私の結界を勝手に発動させるとは.....何者ですか？」

少女が振り向くとそこには紫色の長髪に、鎖の付いたダガーを構え、眼帯をした女性がいた。

「何者よ。あんた？」

「私の名前はライダー。見たところ貴方も魔術師みたいですね。さあ、あなたのサーヴァントを……………つう！？」

女性が話している途中に、火の玉が女性の横を掠めた。

「全く、面倒な相手が来たみたいね。いいわ、相手してあげる。このリタ・モルディオが」

第6話 暗闇に潜む者たち（後書き）

次回、リタVSライダーです。

第7話 ライダーVSリタ（前書き）

今回はリタVSライダーの戦いが始まります。

第7話 ライダーVSリタ

リタがライダーと対峙している頃、ユーリ達は教室で突然発生した結界の中で倒れる生徒たちの状態を見ていた。

「マズイわね。この結界。生徒たちの生命力を奪っているみたい。このままいけば全員……」

「遠坂、どうするんだ？このままだとみんなが……」

士郎がそう言うと、ユーリとエステルは……

「エステル。治療術でどうにかできないか？」

「ごめんなさい。回復させてもこの結界が直ぐに奪っていくみたいなんです。」

「じゃあ、この結界をどうにかしなきゃいけないって言うことが。凜、急いでこの結界止めるぞ」

「そうね。衛宮くん、セイバー。とりあえずこの間結界を見つけた屋上まで行くわよ。」

「ああ、分かった。」

「分かりました。」

セイバーが一瞬で騎士甲冑の姿になり、凜たちは急いで屋上にある結界まで向かった。

屋上では、ライダーとリタが対峙していた。

「ファイヤーボール！」

「ふっ、その程度の火球で私を倒すのは無理です。」

ライダーは素早く動き、リタの攻撃を全て回避した。リタが放った攻撃は屋上の扉あたり、爆発した。ライダーは攻撃を回避しリタに向かってダガーを投げつけた。ダガーはリタの腕に巻きついた。

「くっ、ちょっと、離しなさいよ！」

「あなたの敵である私が言つとおりにすると思っているのですか？」

ライダーはダガーをもう一本取り出し、リタへ投げつけた。リタは避けようと後ろに避けようとするがライダーが鎖を前に引き、リタの動きを封じた。

「終わりですね。魔術師。」

ライダーが勝利を確信した瞬間、リタに放たれたダガーが何かに弾かれた。

「!？」

リタの前に現れたのはニバンボシを持ったユーリだった。

「ショートカット成功だな。」

「って、ユーリ。こんな所にいたの？」

リタがユーリの姿を見て驚いていた。ユーリはリタを縛っていた鎖を切り取った。

一方その頃、凜たちは屋上へと向かっていた。

「たくつ、あんな無茶なショートカットあるかしら？」

凜が走りながらため息を付いていると、セイバーが真剣な表情をしていた。

「ですが、あの爆発音は一体……」

「ユーリはその爆発音が気になって窓から屋上へと跳んでいきましたが……」

「どんなだけ無茶なことをするんだよ」

士郎とエステルが苦笑いしながら言うのであった。

「なるほど、貴方があのバーサーカーを退けたサーヴァントですか。」

ライダーがユーリの姿を見て言うと、ライダーはアイマスクに手をかけた。

「あまり使いたくなかったですが、貴方ほどの強さなら……使おうしありません」

そう言つてライダーがアイマスクを外し、カッと目を見開く。その瞬間、ユーリとリタの体に異変が起きた。

「ぐっ……！」

「これは……」

二人の体が突然重くなった。

「私の目は石化の魔眼。私の視野に写ったものの全てを術中に囚われる。」

ライダーはユーリの両足にダガーを刺した。

「ぐああああー!!」

「ちょっと、あんたの相手は私よ。」

「悪いですが、本来の目的である聖杯戦争の参加魔術師とサーヴァントを倒すことを優先させます。」

ライダーはさらにダガーを投げつけ、ユーリの左肩と右脇腹にダガーが刺した。

「ぐっ、」

「確実に止めを刺します。」

ライダーは自らの首にダガーを突き刺し、自らの血が吹き出て、ライダーの前で血が不気味な魔法陣を描き、魔法陣が光輝き、光がおさまり、前を見るとライダーの姿が無い。リタが上を見るとそこには翼の生えた白馬に乗ったライダーの姿があった。

「何だありや？」

「ペガサス！？」

「そうです。天を自由に駆る神代の幻獣です！」

ライダーが話す。

「今、発動してる私の宝具”ブラッドフォード・アンドロメダ”とこの魔眼”キュベレイ”の力によって動けない貴方にこの子の攻撃がかわせますか？」

ペガサスの頭を撫でながら話す。

「宝具ってアレか。ランサーが持っていた槍みたいなものか」

「ええ、これが私の宝具です。」

ライダーは握っていた手綱を見せた。

「この子は騎乗兵としての私の能力の具現！私の手綱はこの子の潜

在能力を極限まで発揮させる道具。これで終わりですね。ナイトのサーヴァント」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0888y/>

Fate / Vesperia

2011年11月17日21時29分発行